

No.56 深井 隆 —無題—

Takashi Hukai

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 10月 15日付 立川市市報記事より

深井隆の羽がついた石の椅子は、本来白い車止めの石が置かれる場所にあって、人が座る瞬間を涼しげに待っている。

ファーレ立川には椅子やベンチが多く、ここにやって来る人を待っている。いわば巡礼のご休息所だ。これらは人が座ると実に生き生きとしてくる。写真を撮ってみるとよくわかるのだが、こういう座るための物だけでなく、アートがある風景は人がそこにいて初めて活気づき、豊かなものになってくる。

その意味ではアートは、街のなかにありながら人の登場を待つ劇場の舞台のような仕掛けとなっている。人がいて初めて場面が息づいてくるのだろう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

安らぎの中に・・

幸福には個々の家庭的な問題や社会的な条件がある。

社会的な条件の一つに環境がある。

あまり良い言い方ではないが、適当に飼いならされた自然 (原生林ではなく林、氾濫する河ではなく小川など・・) の中に、文化的で美しい建築物に住みたいと多くの人は思う。

時に電気もない砂漠に旅して感動もするが、一生そこに暮らしたいとは考えない。

旅で出会う大自然は私たちの心にたまった贅肉をはぎ取ってくれる。しかし、過酷な自然との生活は多くの人の内的世界をあまり豊かにしない。(そのような所ですばらしく創造的な人生を送る人も中にはいる。だが、稀だと思う。)

豊かになる前に人は疲れ果ててしまう。

美しい空間や環境は人をよりやさしくする。できれば私の作品もその空間に美や安らぎを奏でる一つでありたいと願う。

今回は「車止め」という設置理由がはじめからある作品なので石を使い、多くの人々の記憶に止まるようなシンプルな形にした。

二つの椅子は座っていただいても結構。

生活や時間にどっぷりと浸かり、人とともに在ることを望んだ作品なのだから。